

雄おだけあつて雌めには唯其名殘だいなまなだがあるばかりで  
す。何故なぜでせうか。



拜啓の度婦人と子と申雑誌、御發行の上にて、一部御寄  
贈下され、謝し奉り候、ついては、右の材料にもがなと存候て  
この程中、鹿洲全集より、譯しおき候質婦傳を、御覽に入れ候  
併し漢文直譯ゆゑ、ぎくへとして読み難かるべしと存候へ共  
もと鹿洲の文章ゆゑ、漢文流に自らの趣味あるらのをこぶへ  
く意譯にするは一々よからぬまゝ、かくるものしたることに  
候。

次に、この質婦傳は、わが明治の御婦人たには、如何とも心  
附きたるふしゝも候へども、その心を守ることのかたきとし  
る、夫を助くる心はえのころなど、いと目出度存候、たゞ所が  
はれは品からはるゝと書ふたとての如く、その心をつくすむきへ  
の、うけかはれぬふしあるは、彼れとわれと、ふろう習はせの  
異ればなり。それさえ汲みわけたまはば、この傳もまた必ず教  
へ草となるべしと存候まゝ、一塵の御斷りを、添えたる事に候

Hated is as blind as love.  
嫉妬の盲田なるは戀愛と同じ。

頬首

杉山文悟

### 賢婦郭氏の傳

郭氏は、字を真順と云ひ、潮陽の周伯玉の妻なり。伯玉は名を瑤と云ひしが、字を以て行はれたり。少にして讀書を好み元の至正年中、茂才異等に擧げられたれども就かず、隱居して自ら樂めり。郭氏と相敬すること、賓の如くなりしかば、時に海濱の冀子と稱せられたり。郭は、幼にして聰慧なりしかば、父、教誨して書を教ふるに、輒ち忘れずして、經學に通し、旁ら子史百家に及びて、能て、善く當世の事を談論するに、胸中に了々たり。片言もて断決するも、謀に老けたる者と雖も、以て過くること無し。」元の末に、大に亂れて盜賊ども鑿起せしかば、伯玉に從ひて居を村寨にさけたるに、寨の衆ら、方さに潛に嘯聚を思ひ、守望を

聯絡し、郷村を保んすると云ふを以て名と爲し、伯玉が、故より長者なるを聞き、群りて領袖に推し、將に奉して以て寨事を主らしめんとせり。伯玉、之を許し、歸りて郭氏に告げたれば、郭の曰く不可なり、寨中の諸少年は、方さに驕傑にして自ら用ひ、其の氣は下す可からざれば、勢ひ皆人の下と爲る能はず。而かるに、公が禍首となるは、亦恐ならずや。夫れ能に矜り、智を衒ふものは敗れ、敵を輕んじて謀の寡きものは亡び、徳を外には智勇の名を負ひて、内には敗亡の實を收むることを、公は何爲ぞ一に此に至れるやと。伯玉の曰く、吾れ已に之を許したれば、奈何んすべきと。郭曰く、第だ病と稱して往くこと勿れ、請ふ公の爲めに之を謝するを得んと。」居ること數日に

して、衆、果して伯玉の所に詣りしに、伯玉は佯り臥して起きず、病を以て報じたれば、衆、頗る望む所を失へり。然れども、猶や、瘞ゆれば、即ち事を観るならんと思へり。郭氏、因て粧を斂りて再拜して、辭するに曰く、公等は伯玉の無能を知らずして、謬りて、重寄に推されしは、光榮已に極れり。鷺劣にして堪えずと雖も、猶首を矯げ自ら奮つて、衆望を慰めんとせしに、不幸にも福の薄く災の生して、當さに疾の作るは、此れ天の伯玉を限る所以なり。願くは、公等よ熟々計りて賢者を立て、伯玉の爲めに猶豫して、事機を失ふことを致す勿れと。衆ら、其の言を然りとして遂に引き去り、別に主を求めて之を立てたり。未だ幾ばくならずして、意見の協はざるを以て、立つる所の者を殺し、自ら相雄長たりしかば、寨中

大に備れて、隣賊の爲めに陥られられぬ。伯玉は幸にして難に罹らざりしかば、人咸な郭氏の先見に服せりと云ふ。初め、寨中に農賈の儕多かりしゆゑ、相尙んで粟を積みしを、郭は獨、伯玉に勧めて之を分散して餘藏無く、日暮るれば索を綱ひしに、人其の意を喻るもの無かりしが、是に至り賊入りて盡く積聚する所を燔けり。伯玉は、繩を引いて妻子を繫ぎ併せて自ら縛して掠められしもの、如くせしかば、賊は以て意と爲さず、間に乘し脱して溪頭の棲居に至ることを得たり。明の太祖の天下を定むるや、指揮を愈良輔に命して衆を帥いて南征せしむ。時に寨人は、尙未だ歸り附かざりしかば、愈は兵を以て至り、將に之を勦せんとせり。郭氏は、乃ち愈將軍を頤するの引

曰く、

欲爲將軍紀勳績、天家自在麒麟筆、

三十六

將軍開國之武臣、早攀鳳翼附龍鱗。  
 煙雲慘淡蔽九野、半夜捧出扶桑論。  
 前年領兵下南粵、眼底群雄盡流血。  
 馬蹄帶得淮河水、灑向江南作晴雲。  
 潮陽僻在南海瀕、十載不斷干戈塵。  
 客星移處万里外、將軍功名邁前古。  
 輕裘暖帶踏地來、此時特奉聖主恩。  
 將軍功名邁前古、五千健兒猛如虎。  
 天子亦念遐方民、不減襄陽普羊祐。  
 金印斗大龜龍紋、郭氏辭修力不足。  
 此時特奉聖主恩、賢良方正舉之。  
 大開藩衛制方面、金印斗大龜龍紋。  
 宣威布德民大悅、郭氏辭修力不足。  
 黃犧春耕万隴雲、是時特奉聖主恩。  
 去歲壺陽成卒時、父老至今歌詠之。  
 壺山蒼々壺水碧、下車愛民如愛兒。  
 壺山蒼々壺水碧、下車愛民如愛兒。

俱に先んじて卒したるに、里人其の行を高しとしりたり。郭氏は、百二十餘歳の時、伯玉と礪とは  
 舉げられ、河南布政司參議を歷て、朝列大夫に終  
 りたり。郭氏は、即ち礪にして、字を以て行はれ、名儒第一に  
 なり。郭氏は、百二十餘歳の時、伯玉と礪とは  
 俱に先んじて卒したるに、里人其の行を高しとし  
 と。良輔其の詩を得て大に喜べり。郭因て寨人の  
 反状無きことを力言せしかば、良輔の曰く、此  
 の賢女の居る所なれば、其の民必ず馴れんとて、  
 兵を麾いて去れり。溪頭の寨の免るゝを得たるは  
 郭氏が辭を修めたりし力なり。洪武年中、伯玉は  
 賢良方正に擧げられて、徵書至りしに、郭氏又之  
 を止めたり。是に於て、伯玉は辭して就かず、山  
 林を以て終れり。三子ありて礪、礪、礪と云ひ、  
 皆儒術を以て顯はれ、朝に祿せられき。少子彥器  
 は、即ち礪にして、字を以て行はれ、名儒第一に  
 なり。郭氏は、百二十餘歳の時、伯玉と礪とは  
 俱に先んじて卒したるに、里人其の行を高しとし

て、鄉賢に崇祀せり。郭は、年老いたるを以て、  
一たび母家を省みて歸寧を作し、目あたり叙せる  
其の辭に曰く、

天甲年來度二週、

墓桑榆景雪盈頭、

五經立業儒家雅、

三子成名壯志舊、

橋梓有光聯俎豆、

柏舟無憾泛橫流、

階前蘭玉森々秀、

斑綵扶來到首丘、

又數載にして卒せしに、年百二十五歳なり。長子

の穡は、字を彥敬と云ひて、接霞縣令と爲れり。

そし妻の莊氏も、亦書を讀みて大義を知りしかば

居常禮を以て自ら閑りぬ。元の末に、盜起り、鄉

民は多く山谷の間に依り、賊至れば妻孥を擧げ、

巖穴に入りて之を避けたれば、一穴にして多きは

百十人に至りて、男女の別無し。莊氏、獨り入ら

ざれば、彥敬が之を促せしに、莊氏の曰く、男女

の授受は親らせず、行くときは則ち途に異にし、  
居るときは坐を離へざるは禮なり。今亂離の故を  
以て、巖穴の中に混處して、雜然として辨するこ  
と無きは、禮を廢するの甚しきものなれば、妾  
は敢てせずと。彥敬の曰く、然れども其の賊の至  
るあらば、且さに據にせらるゝを如何せんと。莊  
氏色を正して曰く、禮無くして生きるは、死する  
に如かず。即し不幸にして掠めらるれば、君は妾  
が死すること能はずと謂へるか、請ふ先づ之を試  
みんとて、刀を引いて自ら刎ねて死せしに、後三  
日にして賊大舉して其の郷を破りしかば、保全す  
るもの無かりき。君子の曰く、莊氏は賢にして且  
つ智ありと。彦敬も、其の義に感して終身娶らず。  
論に曰く、郭真順は閨中の豪傑なり。その賢にし  
て智あるは、則ち陳嬰の母と辛憲英とを合せて、

一人と爲したるもの、文學と禮法あるは、曹大家の流亞なり。其の志の清高なるは、老萊、陳定、王霸の妻と、差々上下するに堪へたり。其の大年にして百二十五歳を享けしは、則ち古今未だ此れ有るを聞かずして、貞と壽との獨絶を推さるを得ず。二子、皆賢にして芳を奕世に流せり。天の厚きこと、此に至るを得るか。婦の莊氏は、賢徳ありて禮を以て自ら閑り、身を殺して信を明にせり。當日にありて、良人と偕に即ち穴に入らば別なきを畏れず。遂爾として軀を捐つるは、賢智の過ぐるゆゑと爲すに似たれども、三日の後に之を見れば、則ち後なるも先なるも、均しく一死に屬せり。莊氏の智は、及ぶ可からずとなす。是の姑とは是の婦と、禮宗と爲す可し。誰か巾幘場の中、遂に蓋世の豪傑無しと謂はんや。



### 夏月涼

水野忠敬

ところせき庭も涼しく見ゆるまで

稍はなる、夏の夜の月

謙訪忠元

たへかねしひるの暑さも忘れぐま

宿れる月の影の涼しさ

矢田猪平

人々のあつしくといふ聲も

たえて涼しき夏の夜の月

相澤求

涼しさはいつれはあれと川そひの

月すむ宿のはしゐなりけり